

# 現代を映し出す歌

栗木 京子

このたびはコスモス全国大会にお招きいただき、ありがとうございます。コロナが続いて三年越しでお声をかけていただき、本当ならもっとフレッシュユナ人に替えたほうがよかったです。たんじやないか、私はもしかしたら不良債権みたいになつてたんじやないか(笑)、と思うのですけれど、ご厚情をいただいて今日ここに來ることができて、感謝しております。

二〇二〇年初頭からのコロナ禍は、日本だけじゃなくて世界中を巻き込んでたいへんなことになりました。コロナとまったく無関係に生きられた人なんていなかったと思うんですよね。それで、コロナに限らず世の中で起きる出来事を、どううたつていくかという、もちろんうたわないという選択もあると思います。しかしそれでも他者の歌は目に入ってくるわけですし、無縁ではいられないはずですよ。だからこの機会に一度、現代のさまざまな出来事を映し出すというのはどういうことか。鏡でもレンズでも反射板でもいいんですけど、そういうものを自分の中に持つて映し出し、そしてできればなんとかレスポンスしていきたい、うたつていきたいなあと思うわけです。そんなふうを考えて、「現代を映し出す

歌」というタイトルにしました。

## ●『続コロナ禍歌集 2021年〜2022年』より

まず『続コロナ禍歌集 2021年〜2022年』というアンソロジーから歌をピックアップしました。これは去年二〇二二年の十二月に現代歌人協会から出したものです。現代歌人協会が会員から歌を募つて作りしました。現代歌人協会は今、一〇〇〇人ちよつとぐらい会員がいるんですけど、六〇〇人ぐらいの人が歌を寄せて下さった。もう一冊これより前に、2020年版があるのですが、そのときはもう本当に、コロナが急に拡大してマスクも足りなくて、不安だらけであつたふたしている、ワクチンの予約もとれないとかですよ、かなり深刻な歌が多かつたんですが、今回の第二弾では、コロナ禍にだんだん慣れて、それでも多くの問題を抱えながら、みなさんがどんなふうに住生活しているか、ということがよく見えた気がしました。

コロナ禍で消えた無数の灯の一つ神保町の  
飲屋(醉の助) 高野公彦

「神保町の飲屋（酔の助）」、この具体がいいですよ。特に夜の街が危ない、密になりやすいということで、まるで悪者みたいにされましたよね。そういうなかで、特に居酒屋や飲屋が倒産していった。助成金も出ましたが、それだけでは追いつかない。いろんな楽しみが奪われたけれど、その一つとして（酔の助）も消えたという歌。神保町は学士会館や如水会館があり、短歌関係のパーティーが多いんですね。その流れで（酔の助）行こう！となりませんが、ぎゅっと人がたくさん入る飲屋さんで、ドラマの撮影でも使われたりして。みんなでわいわいやった懐かしい場所である（酔の助）が消えちゃったんだなあという思いですよ。さすが飲みのお好きな高野さんのチョイス！さらっと歌っているなかに、コロナというのは健康被害だけでなく、経済的にも私たちを苦しめたことを思わせる歌です。

尾身さんをこの頃は見ずついでマスクはづし  
たくなる秋の昼すぎ 影山一男

この歌も固有名詞が生きています。新型コロナ感染症対策会議のスポークスマンとして、毎日のように発信をしていた



栗木京子氏

尾身茂さん。医療関係や保健所関係などいろんな人がワイドショーに出てしゃべっていたけど、やっぱり尾身さんが最も印象に残っているように思います。樂觀的なことは言わずに、淡々と注意を呼び掛ける姿は信頼感があった。まったく関係ないけれど、オミクロン株が登場したこともあり（笑）、印象深い尾身さん。下の句で季節感を配しているのがいいですね。だんだん状況が落ち着いてきて、尾身さんも出なくなりました。せっかくな秋になったから、マスクを外して散歩でもしたいという、自然な実感を入れたところが共感を呼びます。

江戸川区、中止となりて安堵する小学生の  
パラリンピック観戦 小野雅子

背景にはコロナがありながらも、コロナ禍に起こった他の出来事に目を向けた歌。小野雅子さんは小野茂樹さんの奥様ですから、もう八十年代でしょうか。小学生というのはお孫さんのことですね。これを読むと、そうだとオリリンピックがあったんだと思いますね。コロナで一年延期され、東京で開催されました。江戸川区に住んでいる小学生は特別枠として、学校が引率して観に行くという企画があったんですね。パラリンピックというのがいいですね。体に障害を抱えた方が真摯にスポーツに取り組んでいる、それを小学生が応援するすばらしいことです。ただ、やはりコロナ禍でしたから、祖母の立場としては、見せてあげたいけれど、中止になって安堵されたのだと思います。江戸川区、パラリンピック、小学生と、具体的に詠まれていて気持ち伝わって一首です。

得 thể知れぬウイリスの跋扈にまぎれつつ内  
親王の「彼」のことなど 島田修三

この歌はあえて具体をぼかしているのだと思います。新型コロナナと言わずに得体の知れないウイルス、言われてみればたしかにそうですよね。そのウイルスの跋扈にまぎれつつ、内親王の「彼」。秋篠宮家の長女真子様のご……。改めて検索してみると、真子様が婚約を発表されたのは2017年。コロナより三年も前に婚約発表していたにも拘わらず、相手の家族の問題などで結婚の儀を延期しているうちにコロナ禍となり、ようやく結婚したのは2022年の秋。長すぎる春にならなくてよかったです。余談ですが私は真子様と誕生日が同じで（笑）、なんとなく気の毒に思っちゃいました。ついでに言うと、じつは、いま問題になっているジャーニーさんも同じ誕生日で（笑）。あ、すみません脱線しました。島田さんは風刺をさかせる人ですが、あえて真子様を内親王、小室さんを「彼」と呼び、まわりくどい言い方をしている。それによって、得体の知れないウイルスも曖昧、内親王の「彼」をめぐる騒動もなんとなく腑に落ちない、もやもやした気持ちを表現している。嫌味ですけどどうまいなあと思います。

次の二首は、医療関係者の方の作品です。

人よりも看護師として期待されもうずっと  
ずっと白夜に生きる

平山繁美

医療従事者の方々には本当に頭が下がる思いです。平山さんはコロナ病床もある大きな病院にお勤めの看護師さんです。医療従事者の方は疲れていて大変だろうと思いつつも、やはり病院に頼らざるを得ない。不安があればぶつけてしまう。そんななかで、時間かまわずがんばらざるを得ない。看護師

として患者から期待され、それに応えている。そういう自分  
はもうずっとずっと白夜に生きると言っている。白夜という  
のがこの歌の一番すごいところだと思います。ずっとずっと  
闇夜に生きるだったら、たいしてインパクトがない。白夜と  
言うことで、治療室や医療機器が稼働して明かりが落ちるこ  
とのない病院、そこに繋がれたままでないさやいけない。明  
けることがない、解放されることがない。そう思うと北欧の  
白夜の国もロマンチックなだけではなく怖さを感じますよね。  
闇が来ない時間というのは、あらためて考えると怖いなあと思  
感じます。

まつすぐに肩峰下深くワクチンを射つに慣

井野佐登

れたり患者も我も  
こちらは医者さんです。コロナワクチンを射つのは肩峰  
下、肩の峰の下ということで、腕を肩まで出して、めくれな  
い場合は真冬でもセーター脱いでくださいって言われました  
よね。インフルエンザワクチンなどの皮下注射と違って、肩  
のどがった部分のすぐ下に射つ筋肉注射だったからです。結  
句で「患者も我も」としているのは、患者だけでなく医師の  
自分もそういった経験がいままでなかったということ率直  
にうたっておられます。そうか、射つ方のお医者さんも緊張  
していたのかと、如実に伝わってきます。

オンライン会議終はればしんとひとり生身

小島ゆかり

この三年間でオンライン会議が増えましたね。画面上にい  
くつも窓があつて、会議中は顔も見えない声も聞こえませ  
ら、画面上ではあるけれど、みんなに会っている感じがしま

す。でも、終わりますと言って退室ボタンを押すと、一瞬にしてしんとひとりになっちゃう。地球上から宇宙空間にびよんと放り出されたみたい。そのあとで、生身の桃を猛然と食むという、上の句と下の句の対比がすばらしいと思います。別に人恋しいというわけではなく、自分の体とか感覚でさえもなんだか借り物のように思えてしまう。多少お行儀悪くても、生きていけるというなにか、自分には体温があつて動きもあるという手ごたえが欲しくなる。あえて「生身の桃」と表現することで、ジャムやコンポートではなく加工していない命としての桃を猛然と食べる、汁なんかも垂れたかもしれない。そんな情景が浮かびます。林檎では硬いですから、そうではなく柔らかくて汁っぽい桃を選んだのがいいですね。

バランスボールに乗りつつ上下に揺れてゐるけふも部長は画面の中  
沢村斉美

これもオンライン会議の歌ですね。沢村さんは大手の新聞社にお勤めなので、同じ部署の部長のことですかね。その部長が、オンライン会議のときに自宅でバランスボールに乗りながら参加してたことでしょね、ラフですね(笑)。もしかしたら、部下がリラックスして会議に参加できるようにという配慮なのかもしれませんが。オンライン会議というのがコロナ禍の一つのスタイルになったことを思わせる歌です。

### ●最近の歌集より

次は、ここ一、二年に出た歌集の中から作品を引いてみました。まずは坂井修一さんの歌集です。タイトルの「塗中」

は道の途中などの「途中」ではなくて、塗るという字。『莊子』に典故があるようです。

AIに歌詠めぬとおもはぬが恋はぬ死なぬのなにがおもしろ  
坂井修一『塗中騷』

生成AIのチャットGPTのことですね。AIに短歌の仕組みを教えて歌を作らせると、それなりのものができてきます。学習した短歌のデータから話者の要望に沿った歌を出してくる仕組みで、最初は紋切型で散文的ですが、要求を繰り返すうちに学習していつて少しずつそれらしいものができてきます。短歌の世界ではまだなかなか難しいですが、普通の文章であればチャットGPTは手ごわい存在になるといえる解もあり、ある程度までで 사용을禁止しようという動きもあるみたいです。

AIは、教えていけば短歌を詠めないということはないが、電子頭脳は恋をしない、そして死なない。そういう存在がいかに膨大なデータの蓄積を器用に使いこなしたとしてもなにかおもしろいだろうかとうたつていて、確かにそうだと思います。情報工学の専門家の坂井さんに言われると、ちょっとほっとしたりして。万葉集、古今集以来の勅撰集を全部見ても、やっぱり恋の歌、死を悲しむ歌が主流を占めていて、そういう歌は人間に命があり感情があるからこそ魅力があるのであって、知識を精査して歌えるものではありませんね。

この歌は否定の助動詞の「ぬ」を四つ重ねて、最後に「なにがおもしろ」といなすような感じで、文語だけれども中世歌謡みたいにならずながら歌っているのがうまいところだと思います。

セクハラにならないやうに出す小声「命み  
じかし——短歌だ、をとめ」 同

「命短し恋せよ少女」、大ヒットした「ゴンドラの唄」のフリーズですね。吉井勇作詞、中山晋平作曲。芸術座の劇中歌として唄われたものです。戦後では、黒沢明監督の「生きる」という映画の中で、もうすぐ命が終わる主人公の志村喬が雪の中でブランコを漕ぎながら口ずさむシーンがありましたね。

ほんとは「命短し恋せよ少女、紅き唇褪せぬ間に」。大正時代の名曲、愛されてきた曲ですが、その歌詞がいまはセクハラになるかもしれないという問題提起をしている。恋せよ乙女と言っはいけない、恋愛してるの？いつ結婚するの？子供さんはまだ？など、そういうことは聞くべきではない。それはそうだと私も思いますが、曲のなかで、紅い唇をもった命溢れる感情豊かな乙女に恋をしないと言うのは、そんなに悪いことではない気もしますが……。ただ「紅き唇褪せぬ間に」と言われると、褪せてからはだめなのかと（笑）、乙女じゃない者からすると少しカチンときますね（笑）。悪気がなければ言ってもいいわけではないので難しいですよ。だから坂井さんは「短歌だ、をとめ」と言っています。恋は個人の自由だけど、短歌は興味があるなら作っておいたほうがいい、若いころの歌と老年になってからの歌はそれぞれに味があるのだから、と。ちよつと腰が引けるような感じがおもしろい。

次は、これも今年出た歌集で吉川宏志さんの『雪の偶然』。

「道徳」のテスト作りて売り上げを増やし

し日々の資料を刻む 吉川宏志『雪の偶然』

吉川さんは何年前かに早期退職をしましたが、それまでは中学や高校の問題集を作る出版社に勤めてきました。これはその会社を辞める時の歌です。道徳にもテストがあるのかと少し違和感を覚えますね。道徳というのは個々に捉え方が違うわけだから、どうやって自分の身を律していくか、どういう価値基準をもって行動していくかというのは、テストによって回答したり採点したりというものなのか。でもこの歌だと、そういうテストで売り上げが伸びたと言っているのがおぞましいところです。それを会社の利益のために作っていた。吉川さんは優秀な方ですから、きつとすばらしいテストを作られたんじゃないかと思うんですが（笑）。それを退職するにあたってシュレツダーにかけて刻んだ。そこに作者の思いが端的に表われていますね。

ビデオ送っただけだと言えり サラ金のC  
Mに出しチワワのごとく 同

この歌は、一首だけだとちよつとわかりにくいのですが、去年の七月に奈良で街頭演説をしていた安倍晋三元総理が銃弾で撃たれて亡くなるという事件がありました。これは、そのことを詠んだ一連のなかに入っている歌です。犯人は、母親が旧統一教会の信者で、教団へ多額の献金をして家庭がバラバラになってしまったことで恨みを持っていた。その旧統一教会の記念の式典に、安倍元総理がビデオメッセージを寄せたことを知り、総理という強い影響力のある人がそんなことをした、というのでターゲットにしたと供述している。

上の句、安倍元総理側は、信者でもなんでもなくビデオを



送っただけだと言っているんですが、果たしてそれで通るのか。そこで下の句に出てくるのが何十年も前のサラ金のCMに出ていたチワワ。ペットショップにいたいけなチワワ、クーちゃんだったかなあ、そのかわいさのあまり購買意欲を抑えきれなくなったお父さんがサラ金でお金を借りてしまうというCM。チワワには何の罪もなく、図らずもサラ金に手を出させてしまったわけですが、安倍元総理をはじめとする政治家たちの場合はそうはいきませんよ、という強烈なパンチの効いた歌です。ストレートに言っていない、凝っていてねじれた歌。だからこそ、作者の怒りがじわじわと伝わってくる。

次は川野里子さんの歌集『ウォーターリリー』から。

生きるはこのやうにリボンつけること  
リボンのうれしさ焼け残る服

川野里子『ウォーターリリー』

これは広島島の原爆資料館へ行った時の歌です。資料館には原子爆弾で焼けただれた少女の服が展示されている。明るい四句目までに対して、ドキッとするような結句。原爆が落ちる一瞬前まではリボンをつけて喜んでる少女が想像できる。少女のいまの喜び、将来の喜びまでも一瞬にして奪ってしまふのが戦争であるというのを突き付けてきます。リボンという端的なフレーズを二回重ねているところが印象に残ります。ここでちょっと別の歌をあげたいのですが。

戦争に失ひしものひとつにてリボンの長

き麦藁帽子

尾崎左永子『くるびあ街』

川野さんの歌を読んで思い出した歌です。尾崎さんは昭和

の初めの生まれですから、思春期青春期に戦争を体験した世代です。この歌集のときには、松田さえこの名前でした。戦争で失ったもの、亡くなった友人や学びの機会や、そういった大きなものだけではなく、そのひとつに「リボンの長き麦藁帽子」があるというのですね。赤いリボンとかではなく、長いリボンであることに注目します。長いリボンはひらひらする。ひらひらするものは、たとえば空襲から逃げるにはじやまになる、戦時には無駄なもの。でもその無駄が大事だった。無駄を慈しむ時代の象徴が「リボンの長き」であった。そんな思いが込められているように感じます。

火を掲げ灯台はあり火を隠し原子力発電所

ありひとつ岬に 川野里子『ウォーターリリー』

愛媛県の佐田岬にある伊方原発のことですね。高野公彦さんの故郷に近いところで、高野さんもずっと以前からこの原発のことを歌に作られています。この原発は1号機と2号機は操業を終了していますが、3号機が運転中のようにです。岬はいろんな意味で要所になりますね。灯台は船を導くためのものですから当然岬にあります。一方、原子力発電所は炉を冷やす海水を汲み上げるために仕方なく岬に立てられ、その結果、地震や津波の被害という脅威がある。岬はすばらしいところだからこそ、プラスにもマイナスにも利用されてしまふというジレンマを抱えながらうたっています。

川野さんの故郷は大分県で、しばらくはお母さんの介護に、いまままだ家があるのでときどき通っているみたいですが、佐田岬は、豊予海峡を挟んですぐのところ、近いんですね。

だからいつそう思いが深いんでしょう。「火を掲げ」と「火

を隠し」、この対句に、考えさせられるものがあります。

やはらかな毛布にふたり子を溶かしわたしも溶ける 報はれたいな

山木礼子『太陽の横』

山木さんはフルタイムでお勤めをしながら、まだ幼い二人の男の子を育てています。いまは少子化の問題もあって、子育てを家族や親戚だけでなく、いかに社会で支援していくかというのが課題になっていますね。私も経験があります。柔らかかな毛布に子どもを寝かせて、絵本なんか読み聞かせているうちに自分も寝ちゃうんですよ。むしろ自分のほうが先に寝ちゃったりする。そのあと、「報はれたいな」とぼそつと言っている。ちよつと胸が締め付けられるような気持ちになりました。

報われないという気持ちは、幸せな子育てをしていても絶対にある。なにわがまま言ってるんだ、となっちゃいけない。その気持ちは周りの人もすくいあげていかなければいけないと思います。「眠らせ」じゃなく「溶かし」と表現している。たとえばギャンブルなどで「いくらいくら溶かしちゃった」みたいに使われるようですが、そんなことも思い出して、ここでは泥のように眠るといふ感じなんでしょうけれど、それ以上になんだか凄みがある。作者の心の叫びが背後から響いてくるような気がします。

地下鉄でレーズンパンを食べる茶髪の母だついできなさい 同

いいですよねえ。仕事があつて保育園などのお迎えもあつて、子供さんは食べたかもしれないけど、自分はごはんを食

べるひまがなくて、地下鉄でレーズンパンを食べている。苦闘しながらも自暴自棄になっていない。あ、ちよつとはなつてるかなあ(笑)。ひと時代前だった髪をひつ詰めているお母さん像だったかもしれないけれど、このお母さんは茶髪にすることで自分のアイデンティティーを守っている。おしやれというよりは、私は茶髪が似合うと思うから、そこは譲れません！みたいな。そこを保っているというのが頼もしいし、現代のお母さんの歌として、その姿勢は貫いてもらいたいと思います。

わたしから父が産まれるのが怖いわたしは怒鳴ることができない

田村穂隆『湖とファルセット』

田村穂隆さんは、二十代か、そろそろ三十になるぐらいの年齢の歌人です。ほかの歌からも推察すると、どうも、虐待の連鎖みたいなのが続いている家庭で生まれ育つたみたいです。祖父が父を怒鳴ったり殴ったりする、そして父が自分や弟に同じ仕打ちをするといった歌もあります。

「わたし」から父のような人格が産まれて連鎖してしまうのが怖い、「わたし」も父に怒鳴り返したり弱い者に捌け口を求めることができたらいいのかもしれない。でもそれはできない。それは自身の信念でありプライドであるのかもしれないけれど、でもそこで踏みとどまるのはとても辛く過酷なことですよ。こういう虐待の歌がちゃんと詠まれるというのは、やはりいいことだと。いいことと言うのもちよつと違うかもしれませんが、受け止める側も、偏見を持たずに論じることができるようになればと思います。

憎むなら毛深い闇を　でもきつとわたしの

中のヘテロフォビアは　同

ヘテロフォビアというのは異性愛への嫌悪です。自分と違う性を持つ者への嫌悪感があるということ。「毛深い闇」は父親に繋がる男性の象徴であり、その闇を憎むべきかもしれないけれど、さらに自分の心の中を覗き込んでみると、女性嫌悪があるのかもしれない。二重の嫌悪があることをうたっていて、相当な苦しみが伝わってきます。

最近、LGBTQをめぐる葛藤がうたわれるようになってきていますが、そういう歌にも注目していきたいです。差別意識や偏見を持たずに、歌の内容、修辞面にも言及しながら批評できるような世界であってほしいと思います。

### ●最近の読売歌壇の入選歌より

最後に、最近の読売歌壇に入選した作品をご紹介します。すいません、時間が足りなくなってしまうので、急ぎます。どれもわかりやすい歌なので用語の説明などを中心に、簡単に鑑賞していきます。

きっちりと軍手を嵌めて助手席に清掃バイ  
トのヤングケアラ　間瀬昭次

ヤングケアラというのは、介護や家事を中心的に担っている未成年の若者のことですね。いま社会問題にもなっています。両親がおらず、祖父や祖母の介護をしているなどで、学校にも通えないケースもあるみたいです。場面がきっちり描かれていて、よくわかります。

中三の受験勉強ご褒美は全身脱毛が定番ら

しい　甲賀亨子

これ、びっくりしちゃうでしょ。若者の間では男性でも何十万もかかる全身脱毛をするらしいんです。先日たまたま皮膚科に行ったら、若い男性がたくさん来ていて、なにか思ったら、美容皮膚科も兼ねているところで、全身脱毛するみたいなんです。つい興味が湧いてパンフレットももらって帰りました(笑)。それにしても、受験して高校に入学したら全身脱毛って……。世の中の最先端を教えられました。

ファミレスでローマという名のロボットが  
ピザ運び来てピタリ止まれり　高山豊子

最近、こういうの、よく見かけますね。

デジタル化教育現場にはいりしも先生だけ

は人間がいい　柳沢 隆

「先生だけは人間がいい」って、なんか笑っちゃいますが、だんだん笑ってはいられなくなるみたいです。

円安で庶民に遠き江戸の鰯値段上げてもふ  
ゆる異国語　前田尚夫

江戸前の鰯なのに、日本人は食べられなくなって、異国の人ばかりが食べに来る、ということですね。これも現代的な、考えさせられる一首です。

なにかとりとめのない、余分なことばかりしゃべってしまったような気がしますが、これで本日の私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。(拍手)